

■ 書 評



POWER MOOK
《精神医学の基盤》 [1]
特集：薬物療法を精神病理学的視点から考える

石郷岡 純, 加藤 敏 責任編集

学樹書院

2015年1月 238頁

本体価格 4,000円+税

最近、欧米では“Philosophy of Psychiatry”と呼ばれる学際的領域に注目が集まっている。これは、わが国でいう「精神病理学」にほぼ相当するが（英語圏の“Psychopathology”とは、精神症状 [学] を意味する）、近年の神経科学の発展を背景にして、従来の精神医学のパラダイムを改めて問い直そうとする試みである。数年前より Oxford University Press は、同タイトルのモノグラフをシリーズで刊行しているが、精神医学領域のみならず、心理学、哲学、人類学、コンピューター・サイエンスなど、実に様々な分野の専門家が参画し、活発な議論を展開している。DSM-5の思想的中枢を演じた Kenneth Kendler も編集主幹に加わっており、新しい精神病理学の胎動のようなものが予感される。

評者は、こうした海外の動向に呼応する動きが、わが国には見当たらないことを少々不満に思っていたが、ようやく本書にめぐりあって、渇きが潤される思いがした。なにしろ、責任編集が、石郷岡純氏と加藤敏氏という、まさか予期せぬ顔ぶれの精神薬理学と精神病理学のリーダー同士である。冒頭に2人の対談が掲載されているが、その小見出し——『「診断」と「疾病概念」は異なるもの』『「薬物の作用は疾患とは異なるカテゴリーに対して効果を発揮する』『「ドーパミンの機能は疾病からの回復過程に関与している』『「ノセボ効果を増強させるような医療も増えている』など——に、彼らの本特集に寄せる並々ならぬ意欲がうかがわれる。もちろん、その背景にあるのは、近年、わが国に押し寄せたグローバル規模の精神科薬物療法の広がりに対する批判と反省であり、DSM体系の普及後、伝統的な精神科臨床の良質の部分が損なわれ

つつあることへの危惧である。

各論の執筆者も、専門を問わず、広く多士済々の論客が集められている。評者なりの理解と解釈で、とくに興味を引いた箇所を、以下に抜粋してみよう。科学哲学や科学史を専攻する石原孝二氏は、本来の理想からいえば、向精神薬に対する「治療反応性」に精神病理学が左右されるべきではなく（最近、その潜在的インパクトは弱まっているが）、古典的な精神病理学、あるいは将来のDSMが志向する病因論的、病理生理学的なメカニズムにもとづく疾病分類と、いま1つは、かつてJanzarikが示した症状・シンドロームを対象とする精神病理学の、2つの方向性があると論じる。また、兼本浩祐氏は、古典的精神病理学における「内因」という生理的原因の仮装は、精神疾患を身体疾患と同様の「疾患」として取り扱える形式を整えたことを指摘し、それこそが基底障害を想定するという姿勢から薬物療法と本質的關係を持ちうると主張する。かたや、精神疾患の神経画像研究をリードする村井俊哉氏は、精神病理学と神経科学・EBMの關係に一間一答を反芻し、前者は後者の「オールタナティブズ」という立ち位置がよいのではという見解をクールに小気味よく述べる。その他、治療の有用性の観点からDSMの効用と限界、および臨床診断のあり方を説く大野裕氏、統合失調症の治療を人生の視点から「リカバリー」と見立て、その基盤に抗精神病薬による脳機能の変化を考察する福田正人氏、「生体反応モデル」から内因性うつ病を含む双極性障害の精神病理学を提案する阿部隆明氏、薬物療法により「改善」する注意欠如・多動症の児童の主観的、心理的な体験に留意することを促す岡田俊氏ら、注目すべき論考がずらりと並ぶ。もともと、各論考は決して統一した見解をめざしているわけではない。編者も断っているように、むしろ思索の異種性を感じ取るこそが、精神病理学の醍醐味であろう。

総じて、評者は、本書にわが国独特の精神病理学、いや、“Philosophy of Psychiatry”の良き伝統を感じた。本書「Power Mook《精神医学の基盤》」は、シリーズ化して刊行されるという、今後も続く思索のゆくえが楽しみである。

(黒木俊秀)